
恋歌

莓

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋歌

【Nコード】

N0344B

【作者名】

莓

【あらすじ】

私と彼方はただの幼なじみだと思った……。でも、気づいたよ。一番大切な人……。彼方をずっとみてるよ。

第1話 大切なひと

あなたと出会って14年・・・

私はいろいろな思い出を覚えてる

泣くほど喜んだ日・・・

何日も部屋からでれないほどつらかった日・・・

私はどれもおぼえてるよ・・・

でも、どれもいい思い出だったよ・・・

それは、全部あなたのおかげだった。

どんなとき

もそばにいて

どんな時も

はげましてくれて

いつもそれ

だけが支えだった・・・

あの日だっ

てあなたに勇気づけられた

・・・桜が満開の日だったよね

そういえば・

あの、桜も

日が経てば散る・・・私も

「おい！！奈月、学校の行く時間だぞ！！！！」

と奈月^{なつき}をゆさぶる男の子。

男の子の名前は、仙崎^{せんざき}彼方^{かなた}15歳。私、瀬戸奈月の幼なじみ。

「ん・・・？なんだ・・・彼方か。」

「なんだとはなんだ？とゆうか、学校に遅れるよ。」

「うそ！！！！」

奈月は急いで着替えた。

「準備OK！！！！彼方行こう！！」

「ほら、いそぐぞ！！」

奈月は、彼方の自転車に乗った。

こんな私をいつもやさしく起こしてくれる彼方。私は、毎日が幸せだった。

く夏休みく

「おまえ大丈夫か？」

と彼方が心配そうにしている。

「うん。たぶん・・・」

「じゃあ、行ってくるからな。ぜったい無理するなよ。」

と言い、彼方はサッカーの全国大会の試合へいった。

「あゝあ。かぜしんどいなあ。」

とつらそうな奈月。奈月は38・5の熱が1週間続いた。

奈月は、つまらないので小さい頃のアルバムを見た。

「へえー」彼方小さくてカワイイ!!」

もう1ページを開くと手紙みたいのが落ちてきた。

「何だろう?」

奈月は宛名を見た。

（私に・・・？それに送れ主は彼方のお母さん・・・？）

奈月は手紙を読んだ。

「奈月ちゃんへ」

彼方は元気にしてるかしら？　さみしくしてない？

私、奈月ちゃんにお願いがあるの。　彼方のことずっと見ててくれないかしら。

本当は私が生きてみてあげればいいんだけど、やっぱり無理だったみたい。

彼方も奈月ちゃんの方がなんでも話しやすいとおもっから。

じゃあ、よろしくね。

「彼方の母」

奈月の目から1粒の涙が出てきた。

その涙をぬぐい、家を出た。

（わかったよ・・・。私^ずっと彼方のこと見てるね。）

奈月は、国立競技場に向かった。中は、とてつもなく盛大すごい

歓声がきこえた。

観客席にいくと、親友の杏^{あん}がいた。

「あれ？奈月、今日は風邪でこないって言ってなかった？」

「うん・・・でも、心配で・・・」

すると、彼方が見えた。でも、よく見ると足に包帯を巻いている。

「どうしたの??彼方」

「実は、ちょっと前に相手選手の足が彼方君の足に当たって・・・」

「そうなんだ・・・」

（ほら・・・私が見てないから彼方はケガしちゃったでしょ・・・）

ますます不安になる。

今は、後半戦でどちらとも引き分け。時間がないのであと1回、ゴールをしたら優勝となる。

彼方は足を引きずっている。

（痛そう・・・）

すると、また相手選手にぶつかった。

ゝ ドサッ ゝ とたおれた。

思わず奈月は立ち上がり、観客席の一番下に下りた。そして、大声で叫んだ。

「がんばってーーーー！！！！彼方ーーーー！！」

彼方は奈月に気づき最初は驚いたが、奈月に向かってピースをした。

奈月は顔を赤くした。

彼方は立ち上がり、パスを受ける。

そのまま走っていく。それは、ケガをしてるようには見えなかった。

ゴールまで5メートルのところでケガをしている足でゴールをきめた。

その瞬間、すごい歓声があがった。

（良かった・・・）

すると、奈月に激しい頭痛がした。次にめまいもする。

立ってるのもつらい・・・

ドサツと奈月が倒れた。

杏は急いで奈月に駆け寄る。

「奈月・・・？奈月！！！！」

といつても反応がない。

「彼方くん!!! 奈月があ!!!」

さっきまで優勝を喜んでいた彼方の顔が一瞬で青ざめた。

「奈月……!!!」

私の人生がこわれるなんて……思いもしなかった……

第1話 大切なひと（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

この次がどうなるかきになりますか？奈月の人生はこれからどんどん変わってきちゃいます。

それに奈月と彼方の恋もです！！

どうぞ、お楽しみに♪

第2話 奈月の秘密

彼方？私最近思うんだあ

あとどれくらい笑えるのかな

それにどれくらい泣けるんだろう

あと少しでもいいから・・・

てほしい

彼方に笑っているところを見て

彼方に覚えててほしい

ただ彼方の瞳に

私を映したくて

奈月は、救急車で運ばれた。

奈月が目をさめた時は、誰もいなくて少し心ぼそかった。

（彼方・・・いないの？）

すると、机の上に手紙があった。

「奈月へ」

おれは、いったん家に帰るけど心配すんなよ。

迎えにいくから。

「彼方」

いかにも彼方らしい手紙だった。

彼方の手紙のおかげですこし勇気がでた。

すると、看護婦さんが来た。

「瀬戸 奈月さん。あの、診察室に来てください。」

と言われた。

「・・・はい・・・」

奈月はなぜか重い感じがした。

「こんにちわ・・・」

奈月は診察室に入った。

お医者さんが椅子に座って顔をけわしそうにカルテをみている。

奈月に気づくとやさしそうな顔をした。なんか、顔は縦に長くひげがあり、いかにもおじいちゃんみたいな人だった。

「奈月さんですね。」

と重々しく医者^が口を開いた。

「最近、高熱^がでたり、頭痛^がしたりそれが何日か続きましたか？」

「・・・ええ・・・はい。」

「・・・そうですか。」

少し沈黙が続いた。

「・・・実は、奈月^{さん}は病気に^かかってます・・・それに・・・
申しにくいんですけど・・・奈月^{さん}の命は・・・あと、

最低2年・・・もって3年で^しょう。」

奈月^は、頭^が真^っ白^{にな}った。

「あの・・・この事はだれにも^言わないで^ください。」

「はい。わかりました。」

奈月^は、あまりにも突然^のことでパニック^{にな}って診察室^を出た。

帰り道、奈月^は涙^が1滴^流れた^{だけ}だった。

「・・・ただいま・・・」

「・・・・・・・・。」

家には誰もいなかった。

すごくさみしかった……

奈月はソファーにしゃがみこんだ。

すると、電話がなった。

「はい。瀬戸ですけど。」

「あッオレ、彼方なんだけど……大丈夫だったか？」

「……まあ。」

奈月はなぜか落ち着いた。

「ありがとう。今日すごくはげみになった。」

と彼方は元気だった。

（こっちだよ……いつもはげみになってるのは。彼方の声聞いた
ら落ち着いた）

奈月は涙があふれる。

「……奈月？」

奈月の声が聞こえなくなつて彼方は心配した。

「彼方！！さ、さみしいよ……怖い……よ」

「どうした！！！奈月！？」

彼方は心配になった。

「いますぐ逢いたいよ・・・」

と奈月は涙をこらえた。

「え？」

「海岸公園の白いベンチで待ってる。」

「ちょ、ちよっと待って。」

彼方は奈月を落ちつかせようとした。

「私・・・待ってるからね。」

「・・・わかった。」

彼方はわかった。奈月は思いつめられていることに気づいた。

もう時計は10時をさしていた。

あのかきは自分では、かかえきれなかった

ショックをどうすればいいかわからなかった

ただ、死ぬのが怖かったんじゃない

あの時の気持ちは今でも覚えてる

・・・だれにも愛されないで死ぬのが怖かったんだ・・・

第2話 奈月の秘密（後書き）

どうでしたか？

奈月の気持ちが変わりますか？

もしあなたが少しで死ぬとわかったら最後になにをしますか？

第3話 奈月の過去

僕は奈月が大好きだ

いつも僕のそばにいて笑ってくれる

でも、奈月が不安そうな顔をするときすごく心配になる

それに隠し事も多い・・・

不安な顔を僕がすると奈月はなぜか歌を歌ってくれる

その歌は愛が感じる・・・

奈月は海岸公園で1人で待っていた。

（怖いよ・・・彼方、早く来て。でも、来ないかも・・・）

すると足音が聞こえた。

「・・・奈月？」

彼方が歩みよってきた。

「ああやっぱり奈月だ！どうした！？」

奈月は思わず、彼方に抱きついた。

「わっ！！」

彼方は顔が赤くなった。でも、すぐにわかった。奈月は、震えてた。

「どうした？」

とやさしい声で聞いた。

「彼方に逢いたかった。」

彼方はやさしく抱きしめた。

（すごく温かい・・・彼方の腕は落ち着く。）

「私、すごくさみしいよ。独りにしないで！」

（私ってバカじゃん・・・彼方にこんなに迷惑かけてその上、困らせて・・・）

「ほんとにどうした？なにかあったんなら言えよ。俺達、いつも一緒だろ？」

そのときの私の支えは、やさしい彼方だった。

俺達はいつも一緒だろ

その言葉だけ頭から離れない。

それって……これからもだね。私わかんない……彼方のこ
と好きなの？……それともただの幼なじみ？

すると、奈月はまた激しい頭痛がした。

「奈月……？」

彼方は奈月を見ると苦しそうに見える。

「奈月！……！」

奈月は、幼い頃の夢を見ていた。

当時4歳の奈月。

「おとうさーん……！」

奈月は父、竜之介りゅうのすけに抱きつく。

「どうした？奈月。」

「あのね、聞きたいことがあるの。」

「うん。なんだい？」

「どうして、お父さんはリラさんの事好きになったの？？」

「え？？」

竜之介は顔が赤くなっている。

「知りた〜い！！」

リラさんとは、名前はカタカナだがれっきとした日本人だ。奈月にとっては母親だが、リラはあまり家に帰ってきたことはない。

リラは、今注目のトップアイドルの「RIRA」なのです。

「お父さんとリラは生徒と先生という関係だった。当時はあまりリラのことは眼中にはなかったんだけど、いつのまにか

リラに夢中で、リラに告白された時すごくうれしかった。そのときわかったんだよ。」

「何が？」

奈月は真剣にきいている。

「愛しいと思える人は一生に一度なんだよ。でもその人は近すぎてわからないときもあるんだよ・・・もし、それがわからないときは最後に逢いたいひとを思い浮かんだらその人が運命の人なんだなあ。」

お父さんは世界一幸せそうな笑顔をした。

これがおとうさんの最後に笑った顔だった。

そういえば、この後だっけ・・・おとうさんが死んだのは・・・

「おとうさん・・・リラさんなんで来ないの???」

奈月は泣きじゃくる。

「リラをゆしてあげなきゃ・・・」

と一生懸命に弱った体を動かす。

「なんで？リラさんは愛してる人のこと見捨てるの?？」

「しょうがないよ・・・」

とやさしい父。

「なんで？なんでなの？リラさんはお父さんのこと好きじゃないの？」

「奈月・・・？お父さんはいつまでも奈月のことが好きだよ。」

すると、竜之介は横たわる。

「お父さんも・・・最後にリラをみたかった・・・」

おとうさんは死んでしまった。

あの頃のことはいまだに思い出したくなかった。

あれ以来、リラさんのことが嫌いになった。

あのととき、リヲさんが来なかったから嫌いになったんじゃない

あの時、おとうさんのこと愛してないことがわかったことに

怒ってるんだ・・・

第3話 奈月の過去（後書き）

どうですか？奈月の過去は複雑ですね・・・。

本当はあまり詳しくは書かないほうがいいとおもったんですけど詳しく書いてほしいという意見があったので書きました。

第4話 だれにも頼れない

彼方はいつもやさしい・・・

いつも私のそばにいてはげましてくれて・・・

でも、それもあとどれくらい・・・？

もって、あと3年しか彼方といられない

どすればいいの・・・？

あたしにはやりたいこと

がたくさんあるのに・・・。

彼方のとなりにもつとい

たかった・・・

奈月は目が覚めた。

「・・・ん？彼方？」

となりには、心配そうに奈月のことを見ていた。

ここはどうやら彼方の部屋だったらしい・・・

「私・・・なんで彼方の部屋に・・・？」

奈月は昨日あったことがおもいだせない。

「倒れたんだよ。奈月は人騒がせだなあ。」

すると、昨日のことが鮮明に思い出した。できれば思い出したくはなかった。

「ありがとう・・・彼方。」

と少し悲しそうな笑顔の奈月に彼方は不安だった。

「あ！ホットミルク飲む？ちょっと待ってて。」

と彼方が部屋から出ようとした。

（行かないで彼方！！）

奈月は無我夢中で彼方に抱きついた。

「・・・奈月？」

とまた赤くなる彼方。

「独りにしないで！！」

奈月も顔をあかくしながら強く抱きしめた。

「あの・・・さ。昨日、病院でなにかあったの？」

「なんで??」

奈月はあせった。

「親父が奈月、病院から泣きながら走っていったって言うてたから・・・」

（やばいよ・・・彼方に気づかれちゃう・・・）

「えっと・・・」

と奈月が言葉につまっていた。

「・・・オレにも言えないの？」

と彼方の冷たい言葉が奈月の心にささる。

奈月は彼方を離し、彼方の部屋から出た。

「奈月!!!」

彼方は叫んだ。でも、奈月には聞こえなかった。

彼方は座りこんだ。

「俺ってそんなに頼りないかなあ・・・」

奈月はたくさん走った。

（私何やってんの??どれだけ彼方の迷惑にかければきがすむの??

もう、私・・・だれも頼らない。）

奈月は家に帰った。

「ただいま・・・」

「・・・。」

誰もいないらしい・・・

奈月は、部屋に入った。

（すんごくさみしい・・・。私、彼方には頼らない。

でも、死ぬ時には彼方に逢っているんなことを話して、そばにいたい。

でも、私はまだ死にたくないよ。もっと生きていたい。でも・・・しょうがないよね。）

奈月はアルバムをみながらそう思った。

どんどん涙が流れてくる。

どの写真にも彼方がいて私は幸せそうに笑っている。

私を笑わせてくれたのは、全部彼方のおかげだね。

いつもとなりにいて私を幸せにしてくれたね・・・

いつも好きだったよ。

―病院―

「おや？紅子^{こうし}くんまだいたのか？」

彼方の父、慎一^{しんいち}が言う。真一は、ここの病院の『仙崎東病院』の医
院長だ。

紅子とは、今度から奈月の担当医になる女の先生だった。

「はい。新しい患者のカルテを整理しようとしていて・・・」

「見せてみなさい。」

紅子は、慎一に見せた。

慎一は目を疑った。

それは、奈月の写真に住所。全部奈月本人のものだ。

「この子はどつゆう病気なんだ？」

「えーっとそれが・・・病名はまだわかってないんですけど・・・それが」

「どうした??」

「じつは・・・余命が最低で2ねん、もって3年・・・」

「・・・!!」

慎一は言葉を失った。

「この子・・・精神的に大丈夫かしら。」

「・・・そうか。じゃあ、早く帰りたいまえ。」

とやっとのことで言葉がでた。

「じゃあ、さようなら。」

紅子が笑顔で見送る。

慎一は、廊下のすみで携帯をだした。

「・・・ああ、私だ。今なにをしていた彼方。」

「あ?別に。」

「今日は、家にいてくれ。」

「はあ???今日は塾なんだけど。」

「それよりも大切な話がある．．．．」

少し、緊張感があつた。

「．．．奈月のことだ。」

「え？奈月のこと．．．わかつた．．．」

私はぜつたいに彼方には知られたくなかつた。

なにがあつても．．．

でもこんな形で知られちゃうなんて．．．思いもしなかつた。

第4話 だれにも頼れない（後書き）

やばいですねー！！彼方に知られちゃいますよー！！
次回は以外な展開があります！期待しててくださいい

第5話 悲しい真実

どうして奈月はあるのに・・・やさしいんだろう

どんなときもあかるくて

母さんが死んだときだって、あいつはオレのことを

やさしく抱きしめて「大丈夫だよ。彼方は独りじゃないよ。」
って

はげましてくれた・・・

オレは奈月が好きだ・・・

愛よりも深い存在・・・

だから奈月には、頼られ

たい・・・

そばにいてほしい、いつ

までも・・・

宝物。

あいつはオレの唯一の

彼方は塾をさぼって待っていた。

奈月とは、もう3日も会っていない。オレ・・・さけられてるのかな・・・

彼方は心配でしろうがなかった。

「何か悩みとか・・・あるのかなあ。」

彼方の頭のなかは、奈月のことだけだった。

ピンポーン

チャイムが鳴った。

「はい。」

彼方がドアを開けると久しぶりの父、慎一がいた。

「久しぶり。父さん。」

「彼方、元気だった・・・でもないか・・・。」

彼方の顔が元気ではないことをものがたっている。

2人はテーブルに座った。

「このごろ奈月がおかしいんだ。」

彼方は頭をかかえる。

慎一は反応する。

「そうか・・・奈月が・・・」

「で、今日はどうした？」

「実は・・・奈月が3日前に病院にきたらしい。」

慎一は暗い口調だ。

「え???奈月、まだ風邪治ってないの??」

「風邪じゃない・・・」

慎一は下を向いてしまった。

「・・・え?」

「奈月・・・病気なんだよ・・・」

「ええ??」

彼方は思わず立ち上がった。

「早く治してやってよ!!!」

「それが・・・治らないんだ。」

「・・・それどうゆう意味だよ・・・」

彼方は顔が青ざめている。

「奈月・・・あと2年もって3年しか・・・3年しか・・・」

慎一が泣いてるは、彼方もわかった。

「う、うそだろ?」

慎一は、カルテをみせた。

彼方は言葉を失った。今にも泣きそうな目をしている。

「お前は・・・私と同じことがおきようとしているなあ。」

「・・・え?」

彼方は顔を上げた。

「お前の母さんも奈月と同じ病気だったんだよ。お前は、雪^{ゆき}にいつもべったりだったな。」

じつは、雪はお前が生まれる前からわかっていたんだよ・・・。」

「慎一??おい慎一!!」

と雪が起こす。

当時16才の慎一と雪。2人は仲の良い幼なじみだった。

「・・・ん?」

目を覚ますと目の前に雪がいた。

「わぁ!!!びつくりしたぁ!!」

「ははは」慎一は朝に弱いんだよね!」

微笑む雪。

この頃からずっと雪のことが気になってしょうがない。

「今日も2人そろって遅刻だね」

こんな幸せな毎日が送れるとおもっていた・・・ずっと・・・

でも、そんな幸せな毎日が崩れてきたのはあの日だった。

最近、雪が元気がなく朝も起こしに来てくれなくなった。

「雪、いますか?」

雪の家にいても

「あら、雪ったら慎一くんで行ったんじゃないかったかしら？」

雪は僕を避け始めた。

でも、その理由を父親から聞いた。僕の父親は仙崎病院の院長だった。

「実は、雪ちゃん……あと4年しか生きられない。」

衝撃的な言葉だった。

僕は雪本人に聞きたくて、夜中の11時に呼び出した。

「雪……あと4年しか生きれないって……本当？」

信じたくなかった。

雪は驚いた顔をして、泣いてしまった。

「……ごめんなさい。でも、慎一には知られなくなかった。心配して、前のように接してくれないと思ったから……」

僕は雪に気持ちを伝えた。

「雪、すごく愛してる。だから、ずっとそばにいてほしい。」

僕は一生、雪を守っていくって決めた。

そのとき2人できめたんだよ・・・最高の思い出を作るって。

慎一は、過去を話した。

「でも、おれ・・・信じられない。」

彼方は、家を飛び出していった。

彼方は携帯を出した。

「・・・あ、もしも??奈月??」

いきなりの電話に驚いている奈月。

「彼方?何・・・?」

「今すぐ海岸公園に来てほしい!!!!」

彼方は息が荒くなっていた。

「え・・・?」

「今すぐにだぞ!!」

彼方は携帯を切った。

オレは、奈月本人から聞かなきゃ絶対に

信じてやるか……

私、知らなかった……

もう、あの時から知られてたんだね。

だって、恐かったんだもん……

……彼方から離れていくようで……

第5話 悲しい真実（後書き）

すごくやばい展開になってきました!!!

彼方はたぶん奈月に頼られたかったんですね。

でも、彼方に言えない奈月の気持ちもわかるとは思いますが……
私は、まだ2人のような青春を送ってはいませんが……

こうゆう恋を高校生にはやっておきたいなあと思っています。

第6話　ずっと一緒

彼方？

私、2年後の夏には

もう、いないかもしれないけど

少しの時間も大切にしていきたいの・・・

あなたと一生の思い出を

作っていきたいの・・・

私は少しわずかな時間だけで

も・・・

てます。

私は、あなたの幸せを願っ

彼方は海岸公園に着いた。

「……奈月は……まだか。」

彼方はベンチに腰掛けた。

本当に奈月があと2・3年しか生きられなかったらどうする……？

彼方は不安が頭をよぎる。

すると、後ろから足音が聞こえた。

「彼方……」

奈月だった。

奈月は彼方のとなりに座った。

「どうしたの??私、びっくりしちゃた。」

奈月は彼方に笑いかける。

（どうして奈月は……笑ってられるんだろう……）

「奈月……風邪治った?」

彼方は優しい口調で話す。

「うん。治っちゃった。」

彼方は下を向く。

・・・今、奈月に嘘をつかれた・・・

「ねえ・・・どうしてオレに嘘つくの？」

「え？」

奈月は驚いた。少し動揺していた。

「なんで？嘘なんてついてないよ・・・？」

奈月は、彼方から目をそらした。

すると、彼方が立ち上がった。

「奈月は・・・オレになんでも言ってくれと思ったのになあ。」

彼方は悲しそうに奈月を見る。

「もしかして・・・彼方知ってるの？私の病気のこと・・・。」

彼方は奈月に笑いながらうなづいた。

「え・・・。」

「どうして俺に言ってくれなかったの？」

「・・・・・・・・。」

奈月は黙ったまま・・・。

「もう・・・いいよ。」

彼方は、公園を立ち去ろうとした。

（イヤ・・・いかないで彼方・・・私を独りにしないで・・・。）

奈月の目から涙が流れてくる。

「いや・・・いかないで！！彼方・・・待って！！！」

奈月は彼方の服をつかむ。

「だって・・・恐かったんだもん。私の病気を知ったら、彼方は私から離れていくと思ったんだもん

もう、今までどつりに遊べないとおもったんだもん！！」

奈月は下を向き、泣く。

（かつこ悪い・・・いつものように泣いて許そうとしてる・・・私、最悪だ・・・）

「本当に困るやつだね。いつも泣いて終わらせて、なんかあったらまたすぐに泣いて・・・。」

で、頼ってくると思っている時に大事な事・・・俺に隠して・・・。」

「ごめんなさい・・・。」

すると、彼方は奈月を優しく抱きしめた。

「でも、俺はずっと奈月と一緒にだよ」

・・・ずっと一緒・・・

奈月は彼方の言葉がうれしかった。

「俺が奈月のこと嫌いになるわけないじゃん。」

彼方のハニカんだ笑顔は今でも忘れない・・・。

不器用で、でも優しくて・・・私はそんな彼方がすごくスキだったんだよ。

第6話　ずっと一緒（後書き）

あー！！とうとう書きちゃいました。

これ書くの案外、楽しみにしてたんですよ・・・

さあ、この次はどうゆう風になるんですかね。

第7話　ずっと一緒&1t;2>;

彼方……

私はあなたのことをいつも困らせてばかりで

ずっと迷惑かけてごめんね。

でも、私はあなたのことをいつも大事に見てるからね。

「起きろー！！奈月、今日は終業式だぞー！！」

今日も彼方は奈月のことを起こしに来た。

「……ん？え……彼方？？」

とガバっとおきた。

「今日、終業式だっけ？？」

奈月は驚く。

「昨日、言っただじゃん！！」

奈月は急いで制服をきて、準備をすました。

「おい奈月！！これ乗っていこうぜ！！」

彼方のハニカんだ笑顔は、一番落ち着く！！

奈月は、笑顔で自転車に乗った。

私は、好きだった。こうやって、後ろから彼方をながめられるんだから……

学校に着いたのは、遅刻ギリギリだった。

「おはよー！！奈月、彼方！！」

そこには杏がいた。でも、なんかやけに1人多いような……

「なんで、涼と手^{うで}なんてつない……で」

杏は顔を赤くして言った。

「じつは、涼と付き合う事になったの。えへ」

（えへ……じゃないよー！！！）

でも、あんな杏の喜ぶ顔が見れるならいいか。

私と彼方と杏と涼は、いつも仲が良くて幼い頃からずっと一緒だった。

めんどくさかった終業式も終わり、もう夏休みのことだけだった。

「ねえ、杏は夏休みどこいくの？」

奈月が杏に聞くと、驚いた顔をした。

「ええ??? 行くんじゃないの??? みんなで沖縄……」

「え? 行くんだっけ??」

奈月はいろいろなことがあつて忘れていた。

「ああ、そういえばいつてたね!!」

と後ろから涼と彼方が聞いていた。

「だよね」

杏は嬉しそうにしている。

すると、奈月は杏に耳打ちした。

「ネエ、彼方もいくの？」

杏も小さな声で話す。

「当たり前でしょ! 彼氏なんだから。」

ちょっと、いまいちな反応の奈月。

「ちがうの?」

「わかんない・・・。」

少し困った感じの奈月。

私と彼方の関係って・・・ただの幼なじみ？それとも・・・

あんまり考えたことなかったけど、どうなんだろう。

帰り道の途中、杏と涼とわかれた。

「ねエ、彼方は夏休みヒマ？」

奈月がいうと、少し考え込む彼方。

「うーん・・・試合はないと思うけど・・・。」

奈月は彼方の返事に喜んだ。

「ってことは??。」

「行け・・・る??。」

彼方は微妙な返事だったが喜んだ。

「やったー!!!。」

すごい喜んでいる奈月の笑顔を彼方も笑顔でながめていた。

「じゃあ今日、おれの家でパンフレット見てく?。」

「うん」

奈月はうれしそうだった。

「おじゃましまーす。」

と入っていくとだれもいない。

「部屋で待つて。」

奈月は彼方の部屋に入った。

「うわぁー！！すごくきれいになってる！！」

前の彼方の部屋は、子供っぽくてジャラジャラなガラクタたくさんあったのに今は、おとなっぽい部屋になっていた。

「どお？模様替えしてみた！！」

「うん。すごくきれいになってる！！」

奈月は、ベットにもたれかかりながらパンフレットをみていた。

ページをめくると、すごく海がすんでいて、砂浜がきれいだった。

「奈月はここにいきたいの？」

「え？・・・うん。」

「じゃあ、ここに決定！！」

と彼方はペンでその部分に。をつけた。

（彼方ってなんかリードしてくれるとゆうか、優しいってゆうか・
・彼方と沖縄いけたら

どんなに楽しいだろうなあ。）

奈月は独りで考えていた。

それをみた彼方は奈月をからかった。

「奈月、顔がにやけてるよ」

「・・・。」

奈月は彼方の声が聞こえてないのか、まだ笑っている。

彼方はいいことを思いついたのか、携帯を出し、奈月の前に向けた。

「パシャ」

と写真を撮った。

その音に気づいた奈月は顔を真っ赤にした。

「もうー！！へんなの撮らないでよー！！」

「やだよー！！」

彼方は携帯を持ちながら部屋を走りまわる。

「もうー!!消してよ!!」

奈月は彼方をベットのほうに押した。

すると、彼方はベットの角に頭をぶつけた。

「痛ってエー!!」

「ゴメン彼方!!」

となつきが駆け寄ったとき、奈月が彼方の足にひっかかりそのまま

彼方のほうに倒れていった。

そのとき、奈月の唇と彼方の唇があたった。

「!?!」

奈月はあまりの事で体が動かない。

「う、ごめんなさい!!」

と涙を浮かべた奈月。

「.....」

彼方は黙ったまま。

「じゃあ．．．帰るね．．．」

奈月はかばんを持ち、走って帰っていった。

家に帰るとおねえちゃんがいた。

「おかえり！奈月！！」

「うん。」

と一言いって、部屋に上がった。

奈月はベットに入り、考えた。

あれって．．．キスっていうんだよね．．．。

考えると、また顔が赤くなる。

（今日は寝れそうにないな．．．）

奈月は頭まで布団をかぶって寝ようとしたが一睡も寝れなかった。

第7話　ずっと一緒&1t;2> ; (後書き)

きゃー♪とうとうキスしちゃいましたあ!!!

やっぱりファーストキスは特別ですよね！

次回は、彼方の過去などいろいろですよ♪お楽しみに!!!

第8話 彼方が来ない

ねえ、彼方は覚えてる？

学校のお泊り会するとき

夜中、抜け出して公園にいったよね

あの時の星や月は今まで見た中で

すごくきれいだったよね

でも、私がおぼえてるのは

ブランコに並んですわって

手をつないで・・・あなたの横顔

をみたことだよ・・・

。ピピピ　　ピピピ。

目覚まし時計がなった。

「う・・・んん」

奈月が起きた。

奈月は少し目がはれている。

（今日はどうやって彼方と接っしようかなあ。）

奈月は心配しながらバス停に向かう。

バス停では、涼と杏がもうすでにいた。

「おはよー！！奈！！」

杏はうれしそう。

「あれ？？彼方は？」

やっぱり、彼方いない。

「実は、彼方の家に行ってみたんだけど留守みたいで。」

涼は心配そうに言った。

奈月も心配になってきた。

（彼方が時間忘れるような人じゃないし・・・遅れる人でもないし・・・）

奈月の頭に不安がよぎる。

すると、時間2分ぐらい遅れてバスが来てしまった。

「どうする??今日はやめとく??」

杏は、奈月に言う。

「じゃあ、2人で行ってきて!!!」

奈月は笑顔で2人に言った。

「えっ・・・でも・・・」

杏は、困っている。

「だって、今日は杏の誕生日でしょ??はい、これ。」

奈月は杏にプレゼントをわたした。中身は、杏が欲がっていた時計だった。

「奈月・・・ありがとう。」

杏は泣き出しそうだった。

奈月なんか、もっと泣き出しそうだったのでバスに背中を向け彼方の家まで走っていった。

（もしかして、昨日のことで私と逢いづらいからこなっかたのかなあ。でも、彼方になにかあってたらどうしよう・・・。）

「ピンポン」

チャイムをならしても反応がない。

彼方はいないはずなのに、不安がよぎる。

奈月は、彼方がいつも鍵を隠しているところから鍵をみつけだし、鍵を開けた。

「彼方??」

「.....」

返事が返ってこない。

（やっぱり、いないのかなあ。）

奈月はリビングにいき、彼方を探した。

「彼方??」

奈月は次に彼方の部屋に行った。

「彼方??いる?」

奈月がはいると、制服のままベッドに寝ないで横たわっている彼方がいた。

「彼方??起きて!!!!」

彼方にさわると、体が熱かった。

（もしかして.....!!!!!!）

彼方のおでこにさわると、熱くて、熱があるようだった。

どうして……こうなったの。

第8話 彼方が来ない（後書き）

うーんコメントしにくいなあ。。。
でも、やっぱり意識しちゃうよね！！！
次回はそんな展開でしょうか？！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0344b/>

恋歌

2010年12月25日02時17分発行